

vol.14

# 風につたへし

「その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく」(世阿弥)。——水のような清らかな心で、遺風に想いを馳せ、そして新風を試みながら。新鋭書家が日々の中で“気づき”を綴る、連載エッセイ。



サイバー都市に浮かぶ映像  
うっし、うっされるもの

文／木下真理子

一九八二年に公開されたリドリー・スコット監督の『ブレードランナー』は、圧倒的な映像美、ヴァンゲリスの耽美な音楽、人間の存在価値を問いかけてくるテーマなどにより、SF映画の金字塔とされている。舞台は、二〇一九年十一月のロサンゼルス——。高度な知能と強靱な肉体を持った人間に見紛うアンドロイド「レプリカント」を、警察の特捜班「ブレードランナー」が追撃してゆく。

有害な酸性雨が降り注ぎ、超高層ビルが建ち並ぶ中、大きな壁面ビジョンには芸者のアップによる「強力わかもと」のCMが映し出され、強烈な印象を残す。公開当時それは、街頭ビジョンの草分けとして既にあった新宿のアルタビジョンとオーバーラップして捉えられた。またハリソン・フォード演じるリック・デッカーがレプリカントと戦う街角もゴールデン街を彷彿させ、歌舞伎町のようにデジタルサイネージで彩られている。中国語や日本語が混淆し、文字や言語の正しい、正しくないも超越して、アジア以外にアラビックな要素もミックスされているなど、異文化の集積と共存による曖昧さは、親しみ深ささえ感じさせる。

また近未来のSF映画と銘打たれていたわりに、当時からどこかアンティークな雰囲気を感じさせているが、それも意図されたことだろう。公開当時から見れば、今まさに、私たちはその未来に立っている。ただ、実際の二〇一九年には何がある、何が無いのか、それを明らかにすることに意味がないことも、この映画は伝えている。

時を遡ること、約八〇〇年前。大火、辻風、飢饉、地震に加えて遷都まで敢行された京都。賀茂御祖神社(下鴨神社)の神職を受け継ぐ出自でありながら、鴨長明は出家し、遁世した。そして世の中に常なるものなどないと、無常観を抱きながら、流されゆくままに『方丈記』を綴った。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」。この感覚を共有したと思った私は、『方丈記』を揮毫した。

映像作家の山本信一さんと出会ったのはその頃。今年の二月だった。知人と訪れたアートギャラリーに、電子音楽とデジタルアートの祭典として世界的に知られる「MUTEK」のブースがあった。Googleとヘッドフォンを装着して椅子に座り、VR(ヴァーチャルリアリティ)の映像を鑑賞。各国から集められた幾つもの作品を観てゆく中で、釘付けになった作品があった。最新技術を使った作品にも拘らず、そこに展開されて

いたのは、モノクロームの世界。まるで量子物理学の素粒子の動きを想像させる「線」と「点」の動き。

以前から書をモーションで表現したいと思っていた私はこの作品に巡り合った。Googleを外し立ち上がると、そこに制作者の山本さんがいた。

山本さんは、SONY MUSICのCCOや日本科学未来館の常設展示映像なども手掛けられている。先のVRのオリジナル・ヴァージョンは、今年、文化庁メディア芸術祭・アート部門・審査委員会推薦作品に選出された。その作品が未来館で特別上映されると聞き、今度はそこに伺った。

会場の「ドームシアターガイア」は、東京湾の臨海区域にそびえる全体が傾斜型のビルの中腹に、ドームの半分を突き出し、外から見ると宙に浮いているかのようなだった。その内部は国内で初めて全天周・超高精細3D映像システムが導入され、空や宇宙を仰ぐような姿勢で椅子に腰かけるという造り。いわゆる全身で映像を受け止めることが出来る。

プログラムが始まり、深い闇の中に私は引きずり込まれた。得体の知れない光が静かに生じ、時に荒々しく、時空を割いて現れては、何処かへ消えてゆく。それは有無の根源、生命の源泉を目にしているようでもあり、また自分が脳神経に迷い込んでしまったかのような体験でもあった。

それから山本さんとは何度かお会いして、映像制作の実際について聞いたり、私からは「KENPOKU ART 2016」に出品した書によるインスタレーション（『墨』二四三号で紹介）について話をするうちに、共同で作品を制作してみようということになった。この試みには、山本さんが引き寄せてくれた先鋭的な音楽家のコリー・フラーさんも参加している。コリーさんの音楽は、あえて例えるなら「アンビエント」に近いのではないかとと思うが、坂本龍一さんとのコラボレーション作品も知られている。

打ち合わせで、三人の中には「サイクル」というキーワードが内在している気がした。サイクルとは「生成と消滅は、繰り返す」という感覚で、流れゆく河にしても、所々で泡だったり、また雨が降ると水面に波紋が浮かぶ、そんなところにサイクルを感じる。

このコラボレーションは、まず私が『方丈記』の一節を揮毫し、その書を『KENPOKU ART 2016』と同様の概念と手法によって、書を正方形のピースに分断した。それを山本さんがプログラミング（一つの方程式に何かを代入して、得られた予期せぬ偶発的なパターンを取り入れること）によって映像化。山本さんいわく「文字と色と周期を「波」の

1. ライトアップされた夜の都庁 2. 新宿クリエイターズ・フェスタの一環で新宿ユニカビジョンに映し出された「Fragments」。木下真理子の書作品「方丈記」が断片化され、音とともに流れ落ちる 3. 新宿の顔ともいえるアルタビジョン。ビジョンを見上げる人も街と同じく刻々と変化する 4. 歌舞伎町には多国籍の人がひしめく。人の活動や欲望が飽和する雑踏 5. 行き交う人波に無常観を抱く木下。エストビジョン パイルミネスト前にて 写真/金武武撮影 新宿クリエイターズ・フェスタ 2019 出品作品の上映風景ほか



ように感じてもらえるものにした」ということだった。コリーさんはピアノなどの楽器の他に、作品制作のメンバーにより『方丈記』を朗読する声をレコーディング。「書をもとにしたアート作品だから、書を音にした声を使うことも面白い」と、かつてウィリアム・パロウズが行った「カット・アップ・メソッド」のように、これを音素材として使うとのことだった。完成した作品には「Fragments（断片）」というタイトルが付けられた。そして図らずも、先述のアルタビジョンをはじめ、ユニカビジョンなど新宿にある四つの大型ビジョンで、『ブレードランナー』の設定と同じく二〇一九年に上映された。新宿区が主催する「新宿クリエイターズ・フェスタ」の一環だった。

今回、作品制作の過程で、私はテクノロジーの進化に触れながら、むしろ人間性とは何かということ、常に自分に問いかけていた。それは一昨年、『ブレードランナー2049』が三十五年越しの続編として公開されたこともあるかもしれない。その続編には、私たちに課せられる「これから」が見られていた。世界は西海岸発の原因不明の大停電により、デジタル・データは全てリセットされ、残った記録媒体は紙によるものだけ。レプリカントが奴隷活動や探検に従事するも、反乱を起こすとまたブレードランナーが撃退してゆくという展開。悲劇は繰り返されていた。結局、フィクションの『ブレードランナー』のデッカードにしても、リアルな世界で『方丈記』を著した長明にしても、どんなに完全無欠で、完璧なものを目の当りにしても、そこに「はかなさ」や「虚無感」を感じてしまう、そんな心の振る舞いこそ、人間らしさなのかもしれない。

完成した作品を現実の新宿で観ることになった。張り巡らされたAIは既に作動している……。大量の情報と人が交差し、欲望、失望、絶望、希望が散乱する中、「離見」の視点、「メタ視点」でそれを捉えた。形あるものは空から生まれ、空の中に回歸し、「私」という自己も明滅する街の断片に過ぎない、と人間らしく、そう感じた。傍で山本さんが呟いた。「自分が在る」って思っている、それってどれ位の自分なのかな。自分って思っていることが本当に自分なのかな」。

木下真理子(きのした まりこ) 雅号は秀翠。大東文化大学卒業。高木聖雨に師事。映画『利休にたすねよ』、『NHK』に『ほんプレミアム』などの題字を手掛け、日経リウスの連載も持つ。伝統文化としての書の魅力を現代的なアプローチにより伝える『日本の美しい文字プロジェクト』も国内外で展開中